

論文の和文要旨

論文題目

近代ロシアにおける二人の信仰者、
G. S. スコヴォロダーおよび P. D. ユルケーヴィチ研究
——ロシア哲学史の再構築のために——

しめい
氏名

う と や よ い
宇 都 弥 生

本論文の目的と構成

われわれがロシアの哲学思想研究に携わろうとするとき、まず初めに参照すべきロシア哲学の古典的通史は、おおよそ 20 世紀前半に書かれたものである (A.I. ヴヴェージェーンスキイ『ロシアにおける哲学の来し方行く末』1898 年、E.L. ラドローフ『ロシア哲学史概観』1912 年、T. マサリク『ロシアとヨーロッパ』1913 年、G.G. シュペート『ロシア哲学の発展の概観』1922 年、B.V. ヤコヴェンコ『ロシア哲学概論』同年ほか)。後には V.V. ゼンコーフスキイの 2 巻本『ロシア哲学史』(パリ、1948、1950 年) や N. ロスキイ『ロシア哲学史』(ニューヨーク、1951 年) など大部の通史が世に現れる——これらも今では古典中の古典に位置づけられる——が、ロシア哲学史の全体を見る基本的な枠組みは 20 世紀の前半に確立されたといっても過言ではない。

哲学史の記述に、各執筆者の哲学観が反映されることは言うまでもないが、とりわけロシア哲学史には「ロシアの特殊性」に対して読者の注意を喚起するものが多かったし、また自国の思想の歴史に対するシュペートやヤコヴェンコらの批判的視点はこれまでほとんど無視され続けてきた。今われわれは、こうした批判的視点を取り入れながら、ロシア哲学史を再構築しなければならない。

本論文の目的は、18 世紀の哲学者グリゴリー・サヴィチ・スコヴォロダー (Grigorij Savvich

Skovoroda, 1722-1794) および 19 世紀の哲学者パムフィール・ダニーロヴィチ・ユルケーヴィチ (Pamfil Danilovich Yurkevich, 1826-1874) の研究を通じて、ロシアにおける哲学的探究の諸相を明るみに出すことにある。

本論文は以下のように構成される。

第 1 部は「スコヴォロダー論」と題され、次の二つの部分からなる。①スコヴォロダーの生涯および著作の概観、②スコヴォロダーの思想。②においては、スコヴォロダーの基本的な世界観とそれを軸にした様々な思索が検討される。

第 2 部は「ユルケーヴィチ論」と題され、次の二つの部分からなる。①ユルケーヴィチの生涯および著作の概観、②ユルケーヴィチの思想。②においては、ユルケーヴィチの主要著作「プラトンの教説における理性とカントの教説における経験」が検討される。

第 1 部「スコヴォロダー論」

18 世紀ウクライナ出身の G.S.スコヴォロダー (1722-1794) は、きわめて学識豊かで、高位聖職者としての前途を囑望されていたにもかかわらず、ロシア帝国の「自由なウクライナ」と呼ばれる地域で、道行く人びとと哲学的問答を交わしながら放浪の日々を過ごした、風変わりな思想家である。「ハリコフのディオゲネス」、「ロシア (ウクライナ) のソクラテス」など様々な異名をとる彼は、後世のロシア・ウクライナの思想家、作家たちに大きな影響を与えてきた。それからまた、20 世紀初頭に書かれた諸々の「ロシア哲学史」記述において、スコヴォロダーは「ロシア最初の、かつロシア独自の哲学者」として評価されている (例えば、A. ヴヴェージェーンスキイ、A. ローセフ、E.L. ラドロフ、B.V. ヤコヴェンコ等)。最近の「ロシア哲学史」記述では、ロシア哲学の起源はさらに遡って 11 世紀頃に求められることが多く、今や、スコヴォロダーが「ロシアで最初の」哲学者と見なされることはなくなった。だが、それでもなお、彼が「ロシア精神の体現者」であるとの評価は、現在にいたるも概ね変わらない。

第 1 章「スコヴォロダーの生涯と著作の概観」

ここでは後代のスコヴォロダー伝説から彼を解放するために、スコヴォロダーの生涯を、M.I. コヴァリーンスキイ著の伝記や、当時のキエフ神学校の教育課程に関する実証的な研究成果等を用いて再構成した。その結果明らかとなったのは、彼が意に反して放浪者として生きざるをなかつたという事実であり、それゆえ放浪者としての彼を英雄視することなく、確固たる活動の基盤を持ちえなかつた彼の知的営為の内実を、揺れ動く当時の複雑な社会的・文化的状況、とくに知的状況に引き戻して捉え直す必要があるということである。

第 2 章「スコヴォロダーの思想」

まず初めに、スコヴォロダーの形而上学的世界観について検討がなされた。彼に特徴的なのは、「可視的なもの」と「不可視的なもの」の二元論と、それを下支えしている汎神論的世界観である。これは、現実を象徴とみる反二元論的世界観である。

また、この形而上学的世界観を軸にしながらスコヴォロダーにおいて、(1) 愛智の基盤と科学批判、(2) 自己認識、および (3) 象徴の意義が語られる。

彼にとって真理は、聖書や神話、寓話のような象徴的言述、すなわち相手の想像力に生き生きと訴

えかけ、相手にその謎解き（自己認識）を迫るような象徴的言述を介して初めて開示されるものである。そういうわけでスコヴォロダの哲学的探求は、もっぱら聖書や広義の口承文学を題材にし、相手の自己革新を促す倫理的・哲学的問答法として展開した。

彼は、西欧と接触し、それまで自明であった伝統的・宗教的世界観が揺らいでいく過程の中で、キリスト教（聖書）に根ざした伝統的な思惟様式を、新しい合理的な思考やアプローチに堪えうるものに変容させようと努力したのである。それは「知の近代化」への内発的な創造的営為であった。

もっとも、スコヴォロダの思索には「合理性」への歩み寄りは見られても、「西欧近代哲学（とくに認識論）」の受容およびそれとの格闘の跡は全く見られない。

第2部「ユルケーヴィチ論」

ロシア神学大学を代表する哲学者ユルケーヴィチは、V.S.ソロヴィヨフ、トルベツコイ兄弟、S.N.ブルガーコフ、S.L.フランク、P.A.フロレンスキイ、V.F.エルンらに直接間接の影響を与え、20世紀初頭ロシアの宗教ルネッサンスを準備した重要人物である。西欧哲学に徹底して向かいあつた学究肌の哲学者であったが、唯物論論争の渦中に身を投じたために、その後「御用学者」、「反動主義者」と見なされ、哲学史においてはその後一世紀近くにわたって捨て置かれることになる。ユルケーヴィチおよび神学大学の哲学が日の目を見るようになったのは、ペレストロイカ以降のことである。

第1章「ユルケーヴィチの生涯と著作の概観」

ユルケーヴィチは1826年、ウクライナのポルタヴァ県で生まれた。1847年キエフ神学大学に入學。1851年から同神学大学で哲学およびドイツ語を教える。キエフ神学大学時代に書かれた論文には「イデア」（1859年）、「神の御言葉の教えに拠るところの、人間の精神生活における心とその意義」、反唯物論論文「人間精神に関する科学から」、「唯物論および哲学の課題」（以上1860年）、「『哲学字彙』所収の神学的内容の諸論文に関して（批判哲学的断片）」、「キリスト教的共生の条件としての隣人との平和」（以上1861年）がある。

1861年、モスクワ大学に十年ぶりに哲学講座が復活すると、ユルケーヴィチはそこに招かれる。同大学で彼は哲学史、論理学、心理学、教育学を講義した。1869～1873年まで彼は、モスクワ大学歴史文学部の学部長を務めた。この間、ロシアの宗教哲学者 V.ソロヴィヨフは彼の講義を聴き、また彼と個人的な交わりを持っている。モスクワ大学時代の哲学的著作には、「生理学者と心理学者の言葉」（1862年）、「プラトンの教説における理性とカントの教説における経験」（1866年）がある。

第2章「ユルケーヴィチの思想」

論文「プラトンの教説における理性とカントの教説における経験」（1866年）は、ユルケーヴィチの代表作である。彼はここで、哲学の歴史をプラトンによって開かれた時代とカントによって開かれた時代とに分け、両哲学者の教説を鮮やかに対比させる。

この論文は、大きく分けて二つの部分から構成されている。前者においてまずプラトンの理性ないしイデアに関する教説が論じられ（プラトン論）、他方、後者においてカントの経験に関する教説が肯定否定の両面から論じられる（カント論）。カント論においてユルケーヴィチが着目するのは『純粋理性批判』「超越論的論理学」の第1版「カテゴリーの超越論的演繹」部分である。そして彼はこの箇所、(1) 素朴実在論の打倒という側面および(2) 心理学的な議論展開を評価する。

(1) 素朴实在論粉碎という側面に関して：「真理とは認識と対象との一致」という真理の名目的定義をめぐる議論から「経験」に関する見解へと達するまでのカントの議論が独特の視点で辿られる。

(2) 心理学的な議論展開に関して：プラトン『テアイテトス』(184e-186b)の議論と、カントの第1版「超越論的演繹」における「三重の総合」の議論展開の類似が指摘される。

しかし、ユルケーヴィチの見るところ、カントが「純粹・不変の意識」を「自己自身の意識」（「超越論的統覚」）とし、「私は考える（Ich denke）」と結びつけたのは、大いなる誤謬であった。カントの主張による限り、存在のあるところには認識はなく、認識のあるところには存在はないのだ。本来これはプラトン流に「真理の意識」とされねばならない。